

プロローグは同窓会で

還暦になって、Dr.K は久しぶりに高校の同窓会に出てみる気になった。男ばかり 200 人近くの大宴会で、胸の名札がなければ思い出せない旧友も大勢いる。

二次会のホテルのロビーでのことだった。何人かずつが輪になってソファーにゆったりと座り、少し落ち着いた会話を楽しんでいた。彼の背中合せのグループの中に小森均がいた。Dr.K とは大学も同じだったが、小森は経済学部で、キャンパスは Dr.K の理学部とはバス通りを隔てた反対側だったし、大学における滞在時間帯がずれていたのだろうか、大学時代にはほとんど道で^{であ}出逢いもしていない。

その小森が大きな声で話している。Dr.K が聞くともなく聞いていると、どうやら孫の話らしい。

「いやあ参ったよ！ 孫にさ、1 足す 1 はなぜ 2 になるのって訊かれてさ、はじめは冗談かとも思ったんだが、どうやら真面目みたいなんだ。それでさ、俺も真面目に答えようとはしてみたんだが、はたと思ったね。^{おれ}俺も知らねえぞ、そんなこと。

俺も悪かったんだ。つまりさ、息子やなんかに説教することがあるじゃないか。1 足す 1 がいつでも 2 になるというような商売をしてちゃだめだ。3 にも 5 にもなるように心がけて初めて 2 になってくれる。同じことばかりやってちゃ、1 足す 1 は 1 にもなるし、下手をすると 1 を切ることだって起こるなんて、まあ、分かったふうなことも言うじゃないか。

それを孫が聞いたらしいんだな。孫は俺に似て、というか、俺に似ず、ちょっと賢くってな。真面目な顔をして、母親に訊いたらしいんだ。

学校だと 1 足す 1 は 2 でないと間違いなのに、どうしておじいちゃんはあることを言うの？ 大人になると、1 足す 1 は 2 になった

りならなかったりするの？学校の勉強は大人になると役に立たないの？

こんなこと訊かれりゃあ、困るわな。それで、嫁が俺のほうに振ってきたのさ。こんなことを言っていますが、間違っただけを覚えては困りますので、きちんと教えてやってもらえないでしょうか、ってな。学校が信頼できないと思うようになると、勉強を嫌いになるかもしれないし、それが心配で、なんて言われてさ。

俺が蒔いた種でもあるし、放っておくこともできないだろう。俺も考えたさ。確かに1足す1が2じゃないって覚えられちゃあ、困るよな。俺だってさ、 $1+1=2$ が当たり前だからこそ、当たり前なことばかりしてちゃダメだと言ってただけなわけだよ。もちろん、 $1+1=2$ 自体を疑っているわけじゃないやね。

疑っているわけじゃあないが、説明しようってことになる、何が問題なのかということも分からんのだなあ、これが。」

できるってヤツがいたら答えてみろとでも言うように、話し相手たちを見回していたが、ふと視線が後ろを向いたとき、Dr.Kを見つけて、小森の表情が変わった。



「おいK、いいところにいた。お前ならできるよな。昔数学が得意だったもん。そういえば、数学の教授やってるっていうじゃないか。」

Dr.Kとしてはとんだ災難である。大会社の社長をやってるせい、小森は身振り手振りも大仰おおぎょうで、威圧するのような感じを与える。声も大きい。が、Dr.Kも伊達だてに長い間教師をやっているわけではない。大声を出す悪童相手に怯ひるんでもいられない。



「昔なら、お前だって数学はできただろうに。僕だって、特別に数学が得意だったわけじゃない。それに今やってる数学は小学生に $1+1=2$ を教えるためのもんじゃないんだがなあ。」

「何言ってるんだ。1+1=2が教えられなくて、数学の教授でございと威張いばってるわけにはいかんだろうが。」

「別に威張ってもいいし、威張るほどのもんでもない。だが、 $1+1=2$ を小学生にちゃんと分かってもらうというのは易しいことじゃないんだ。」

君はさっき、何が問題かも分からんというようなことを言っていたが、まさにそこが問題なんだよ。それを分からせるのが難しいんだ。」

「ほう、まるで禅問答だな。小学生に教えるのが難しいのか、俺に教えるのが難しいのかってことが分からんが、とにかく難しいってことなわけだな。だから教えたくないのか？」

「教えたくないわけじゃないさ。大学にいたって基本的には教師だから、教えることは好きだよ。分からんというヤツに教えるのは特に大好きだ。そんなヤツがフツと分かったという顔をする瞬間、そういうのを見るのは実に教師冥利みょうりというものだ。」

「じゃあいいじゃないか。教えてくれよ。孫にも嫁にも、ひいては息子に対しても大きな顔ができんのだ。」

「本当に簡単じゃないんだ。君は、簡単じゃないってことを信じてないだろう。面倒くさいからって躊躇ためらってるわけじゃないんだ。それに、君を納得させるってことだけなら、やってできないことではないと思うんだがね、そのあとで君がお孫さんに納得できるように話ができるかっていうと、それはずっと難しいことになるというか、たぶん無理だろうね。」

「ハハッ、はっきり言うなあ。でも、そういうものかもしれん...うん、それもそうだな。それにな、孫のこともあるんだけど、俺もどうやら人生の峠は越えたとし、数学がもっと分かっていたら人生も変わっていたかと思うことがあるんだ。いい機会だから、ちゃんと考えてみたいという気持ちもなくなるはない。」

「じゃあ、こうするか。お前が直接孫に教えてやってくれ。俺はそばでそれを聞いてるってことにする。孫と俺の特別家庭教師ってことでどうだ。来てくれれば美味しいもん、食べさせてやるからさ。」

Dr.K は嵐のように変わっていく展開に振り回されて断ることもできず、まあ楽しんでみたのだろうが、とりあえず一度という話が、いつの間にかまとまっていた。小森は立ち上がり Dr.K に握手を求めた。

そのとりあえずが翌週のことになり、Dr.K が小森の家に出掛ける約束がいつの間にかできてしまっていた。高校時代にも行ったことがなかったのに、と言いながら、Dr.K もそれほど嫌そうな顔は



Dr.K が引き受けないでほしいと思っ
ていたのは後見の私だけ
だろう。引き受けるとな
ったら、黒子の仕事は大
変そうだし、本当に難し
い。そもそも1とは何か
を分からせないとけな
い。2とは何かだて易
しくない。+が何で、=
とはどういうことかも小
学生に教えるのか？前
の1と後ろの1が同じ
か否かなんて問題を理
解させるってことがKに
できるのか。お願いだ、
Kさん、断ってくれ!!

していなかった。

これが、この話の発端である。このあと、小森家を訪問し、 $1+1=2$ の話をするようになるのだが、1日では終わらず、とりあえずの決着までに3日もかかるということになってしまう。どうしてそれだけの時間がかかったのかは本書を読んでいただくしかないが、一番問題だったのは言葉の問題だった。Dr.Kは数学しか語れない。それが最大の問題なのだった。



すべてを知ってる私にもわからなかったのだ！

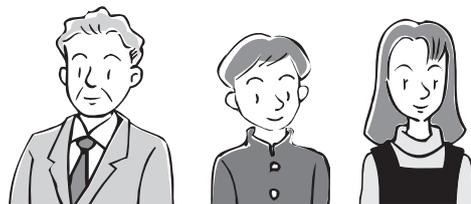
多くの人が登場し、テーマもどんどん広がってゆき、^{うよきよくせつ}紆余曲折をたどって、Dr.K自身の数学が問われる展開^{よし}になっていく。そのことを、このとき、神ならぬ身のDr.Kには知る由もなかった。そして、その時間が過ぎたとき、一番変わったのは、もしかすると、小森の孫でも小森でもなく、Dr.Kだったのかもしれない。



とうとう、始まることになってしまいました。わたくし、本当は黒い衣を着て控えているので黒衣^{くろご}と申すのですが、なぜか黒子^{くろこ}と呼ばれることが多くなりました。

このお芝居、始まった以上、誠心誠意、務めさせていただきます。これ以降は常に、袖に控えておりますので、宜しく願い申し上げます。

登場人物



ひとし
小森 均 (Dr.K の友人)

まさと
小森 正人 (小森の孫. 俊子の息子, マー君, 中学 2 年生)

みおん
小森 美音 (小森の末娘, 大学 2 年生, 教育学部国語科)



きみこ
小森 貴美子 (小森夫人)

としこ
小森 俊子 (正人の母, 小森の長男の嫁)

たつと
早川 竜人 (小森の孫. 理香の息子, タッチャン; 小学 1 年生)

りか
早川 理香 (小森の長女)



Dr.K (小森の友人. 教育学部在職中の数学者):

くろこ
黒子 (この三幕劇の舞台作者であり進行係である. せりふ 台詞では表せない背景や著者の思わぬ独り言など作中人物とは直接かかわりないことをお知らせする. ときどき黒子は見えなくなるが, いつも舞台袖にいる.)

小森家家系図

